

# 落第系騎士の最強英雄譚

KBSトリオ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神様転生した男が楽な生活のために魔導騎士を目指すお話。

# 目次

プロローグ	1
一話	3

## プロローグ

この世界はまるで物語の世界だ。

人間の肉体に魔力(？)というエネルギーがあったり、自身の魂(？)を武装にしたり、魔法使いならぬ魔導騎士なんて職業(？)が国家公認で用意されていたり……。

そして誰もそんなファンタジーやオカルトに疑念を抱かない、だって世界の成り立ちがずっとそうだったからだ。

つまりは、この世界に違和感や小っ恥ずかしさを感じる俺が異端者となる。

しかしそれにも理由はある、なぜなら俺は前世の記憶を持っているからだ。

「……………」前世の俺は普通のサラリーマンだったがある日、雷に打たれて死んだ。

すると天国へ来た俺を出迎えたのはどこか申し訳なさそうな神様で、悪人を狙ったはずの天罰がなんの間違いか俺に当たって死んだことを説明された。

神様もミスはするんだなあ、と思っていたらお詫びに転生させてやると言われた。

今の魂と記憶を引き継いで神様が管理しているもう一つの世界で人生をやり直させてくれるとの事で、俺は有難くそれを受け入れた。普通に考えれば二回目の人生なんてイージーモード、俺は二回目の青春を有意義に楽しもうと思っていた。

そうして二回目の人生が始まれば、こんな世界だった。でもまあ、神様が気を利かせてくれたらしく俺はこの世界において規格外の天才らしかった。

超人的な身体能力、底知れない膨大な魔力、おまけに魔導騎士界限の中でもそこそこの家柄。

魔導騎士としての俺は五歳の頃に父親を超えて、七歳の頃には専属

の家庭教師たちを纏めてボコボコに出来た。

……強すぎると自分でも思うほどに強かった。

このままでは俺自身の強さの余り、逆に処理し切れないような面倒事がやってくるかもと思った俺は落ちぶれようと決めた。

能ある鷹は爪を隠す、そんな事を言っつて父親をどうにか説得した俺はドラ息子を演じた。

魔導騎士としての修練をやめて、山や海でバカンスしまくったり、世界各地を旅行しまくったり、ゲームをしまくったり、家で寝まくったり。

ドラ息子を演じた、なんてのは対父親用の嘘で俺は本当にドラ息子となった。

だつて剣を振ったりするより遊んでた方が楽しいじゃん、しかも家はお金持ちだから偶にある修練で家庭教師たちをボコせばお小遣いが山ほど貰えたし。

んで、そんなこんなしてたら俺も高校生になつてから一年が経つた。

もちろん通っているのは普通の高校ではなく破軍学園と呼ばれる魔導騎士を育成するための学校だ。

なんか物語とか始まりそうだなあ、とか考えながら自分の寮部屋へと入る。

すると中には下着姿の美少女がいた、俺は1人部屋であるため見知らぬ人だ。

「あのー、部屋とか間違えてないですか？」

「い、いやあー！ケダモノおー！」

よく分からないけど、この少女に俺がそう言われるのは色々間違つてる気がした……。

## 一話

本多総司は目を細めて考える、これはどうした物かと。

そう頭では考えつつも少女の肢体をじっくりと観察してしまう、男のサガだ。

すると下着姿のまま素早い動きで迫りくる少女、その振り上げた右手は確実に制裁ビンタのためだ。

総司は下着姿のお礼に一発は打たせてやろうかとも思ったが……やっぱりやめて、少女の手と肩を掴み軽めの関節技を決めた。

「いたたたっ！ちよつと何するのよー！」

「ごめんごめん、でもまずは落ち着いて欲しい」

「変質者にサブミッションを決められて落ち着けるわけないでしょ！」

「へ、変質者か……」

少女の言葉に少し傷つきつつも総司はゆっくりと技を解いて背中を向けた。

そうされては少女も飛び掛かる真似は出来ず、困惑した顔を作る。

「実はここは俺の部屋なんだ」

「はあ？……この部屋は私に割り振られてる部屋のはずよ！2人部屋にしても男女同室なんてあり得ないわ！」

「その通りなんだけど部屋の私物をよく見て欲しい、これが女子の部屋に見えるか？」

「……」

少女は室内を改めて見まわした。

机の上にはロボットの玩具がズラリ、壁には少年漫画系のポスター、テレビ周りには幾つものゲーム機。

これらは入った時から違和感があった……だから着替える前に部屋番号は何度も確認したのだが案内用紙の番号とは合致している。

「じゃあこれ、どういう訳よ？言っておくけど私は部屋を間違えてないわよ」

「うん、けど俺も間違えてないよ。一年前からこの部屋いるし」

「えっ！じゃあアンタ2年生なの!？」

「いや、留年したから今年も1年生」

「まさかの留年生!？」

「だから、事情を知ってるだろう理事長に話しを聞きに行かない？」

「ええ、そうしてみましよう」

「じゃあ外に出て待つてるから」

「あっそうよ！私まだ着替え中なんだから早く出ていきなさいよ！」

(だから出てくって……)

総司は部屋を出て、扉の前で少女を待つ。

待ちながら思う、なんか変な事になって来た。

本当に物語が始まったかのような出会いで妙に気が落ち着かない。

もしや自分は物語の主人公なのか？なんて馬鹿げた考えが過る。

そんな事を少し考えて……はあ、と浅いため息をついた総司。

(自分が主人公だ、なんて考えを持てる精神年齢じゃないだろ、恥ずかしい)

総司が自虐していると扉が開いた、隣部屋のだが。

「総司、女の子の声が隣から聞こえたんだけど……なにかあった？」

現れて総司に話しかけたのは同学年の友達である黒鉄一輝だった。

「ちよつと変な事になったけどそれはいいや……一輝、お前は今年も1人部屋か？」

「だと思っけど」

「じゃあ一つ聞くが見知らぬ美少女と突然同室だなんて事になったら嬉しいか？」

「えーと、あんまり嬉しくないかな。色々と気も使うだろうし」

「ならお前はアタリだったな、んで俺はハズレだ」

「……よく分かんないけどご愁傷様」

面倒くさそうな表情で空を見る総司、そしてそれを苦笑いで見る一輝。

するとまた扉が開いた、今度は総司の部屋から赤髪の少女が現れ

た。

「待たせたわね」

「いやいや、全然ですよお嬢様」

「えっステラ・ヴァーミリオンさん？」

目を丸くして驚く一輝。

「知ってるのか、一輝」

「し、知らないのか総司、海外の国のお姫様だよ？テレビでも留学してくるって持ちきりだったじゃないか」

ギギギつとお姫様に向き直る総司、ステラはジト目で睨み返してくる。

「あのー、さっきのってもしかして国際問題とかになりますか？」

「なに？して欲しいの？」

「いえ、滅相もございません！」

奇麗に頭を下げる総司を一輝は珍しいなと驚く、一年の付き合いだがこの男が誰かに及び腰になるのを見たのは初めてだったからだ。

ふとステラが一輝を不思議そうに見つめていた。

「ところでアナタは誰？」

「僕は黒鉄一輝、そこにいる総司の友達で同じく留年生でもある」

「またもや留年生!？」

驚いたステラを横目に総司が姿勢を正した。

「ちなみにワタクシは本多総司と申します！以後よろしくお願ひ申し上げます！」

「そう言えば名前も知らなかったわね、改めてステラ・ヴァーミリオンよ。よろしく」

「ははーっ！どうかよしなに！」

(そ、そんなお調子者キャラだったけ君は……)

本多総司の弱点その1、国外の権力者。

腕っ節がいくら強くても元はうだつの上がないサラリーマン、スケールのデカイ相手には弱かった。